「日々の理科・田中」（第 143 号） 2014 (H26),11,10

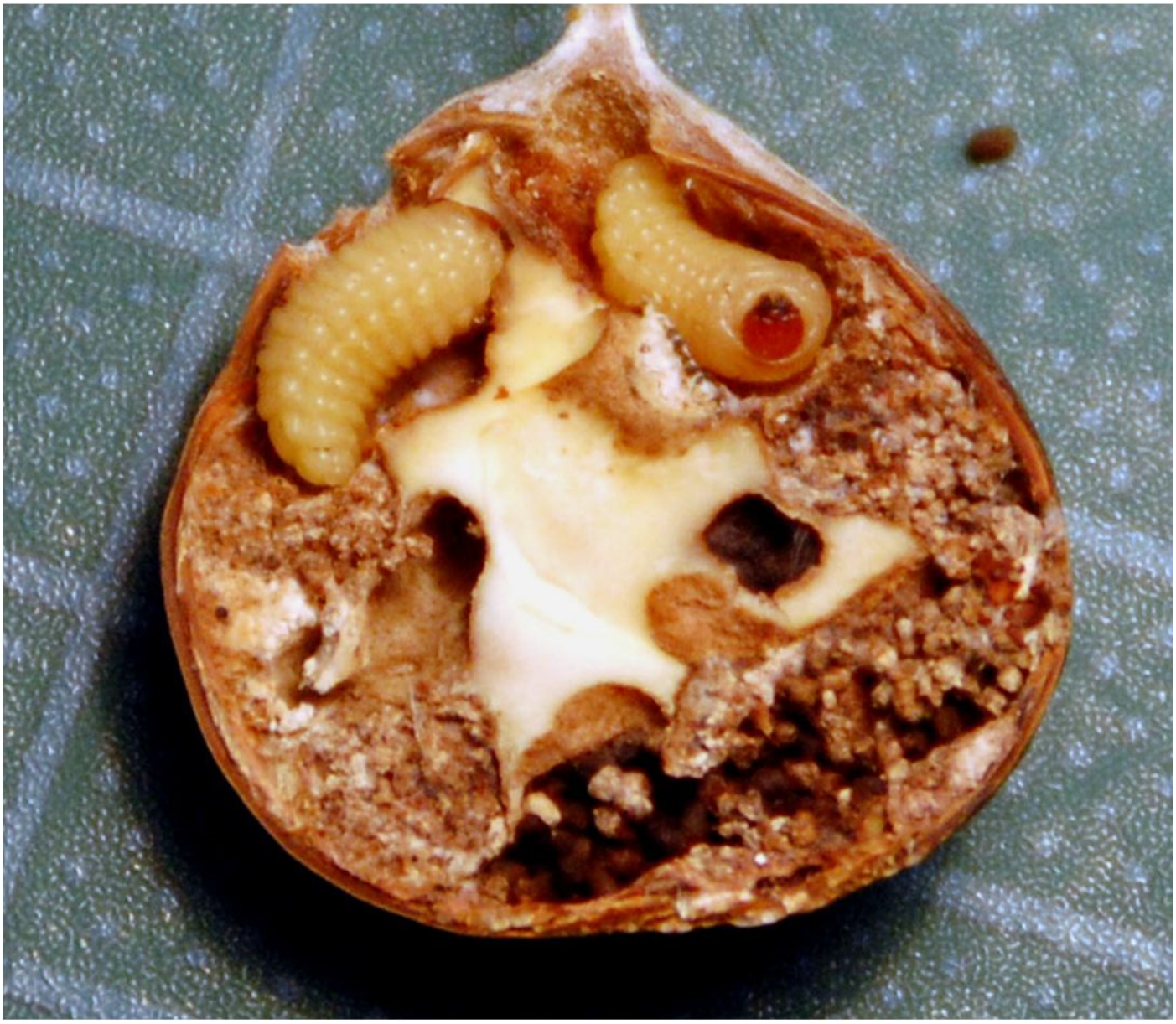
「クリの実の中の幼虫」

クリシギゾウムシの幼虫は、クリの実の中で育ち、終齢になると殻を破って外にでてきます。卵から孵化してずっと暗いクリの実の中にいるので、外に出てくる時が「第二の孵化」とも言えそうです。しかし、その一瞬を目撃するのは容易ではなく、ひたすら待つ以外に方法はありません。穴が２～３個開いているものは、すでに幼虫が出たあとでＮＧです。穴がないものや、穴が１個のものは、中にまだ幼虫がいるかもしれません。中に幼虫がいたとしても、いつ出てくるかはわかりません。お湯で温めると出てくるという人もいますが、それはちょっとかわいそうです。

「クリの実から幼虫が出てきたところ」
残念ながら「出てくる一瞬」は見逃しました！穴の直径よりも、幼虫の胴径のほうが大きいことがポイントです。きっと、体節１か所ずつ、時間をかけて苦労しながら出てくるのでしょう。

授業時間中に、幼虫が出てくる一瞬を観察するのは無理ですが、幼虫がクリの実の中で生活している様子を観察することは可能です。とにかく野生のクリは、相当な確率でこの幼虫の餌食になっています。10 月中旬頃に、実を切れば幼虫に出会えることが多いのです。

幼虫がいる栗の実は、中がスカスカなので、ハサミでも簡単に切れます。しかし、子どもにさせると、幼虫も一緒に切断してしまい、悲惨な結果を招きます。切る作業は教師がやっておいて、幼虫がいた殻は、セロテープで貼り合わせておくことにしました。この方法は意外にうまくいって、中の幼虫も元気なままでした。



「クリの実の中の幼虫」

気を付けて切らないと、幼虫も一緒に切ってしまいます。この実には３匹の幼虫がいたようです。１匹はすでに出たあとで、右下に空洞が残っています。左側の幼虫は、すでに穴をあけて、出ようとする寸前でした。丸い粒は幼虫の糞です。真ん中の白い部分が、食べ残したクリの身です。

【子どものノートから】
「ぞうむしのようちゅうは、くりの中に２ひき、なかよくねていました。ふんがたくさんありました。食じも、ねむるのも、トイレも、全部実の中です。」
「こんなせまくてくらいところで、きゅうくつそうでした。でも元気でよかった。」
「よう虫が、せまいおおへやで、まるまってねてるところが、かわいかったです。」

（お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋）